

[資料]

東京アートポイント計画とは

2009年に立ち上がった「東京アートポイント計画」は、「東京文化発信プロジェクト」の一環として行われている事業である。地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の多様な魅力を創造・発信することを目指している。ここではその概要と成り立ちについて紹介する。

1. 位置づけ | POSITION

東京文化発信プロジェクトは、東京都と東京都歴史文化財団との共催で実施する東京都の公共事業。「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、Festival（フェスティバル）、Kids/Youth（キッズ/ユース）、Artpoint*（アートポイント）、Networking（ネットワーキング）の4事業を、以下の視点から展開している。

※東京アートポイント計画はこのうちの「Artpoint」に該当する事業である。

東京文化発信プロジェクトの4つの視点

- 1 文化の創造を担う国内外の人材を東京に集め、多様な文化を生み出す
- 2 東京に集う人々自身が主体となり、新たな文化を創造する
- 3 新たな東京の文化を世界に発信し、国際ネットワークの重要な拠点となる
- 4 東京の文化力で、震災の復興を支援する

2. 成り立ち | PROCESS

東京都では2016年オリンピック・パラリンピック競技大会招致をきっかけに、東京を世界の文化の中心都市とするため、優れた文化事業や諸都市の国際文化交流を戦略的に展開する必要性を考え、そこで2006年度に東京芸術文化評議会（以下、評議会）を設置。評議会にその文化戦略について諮問を行った。都は評議会からの提言を受けて、2008年度に「東京文化発信プロジェクト」を開始する。その翌年に「東京アートポイント計画」が始動した。

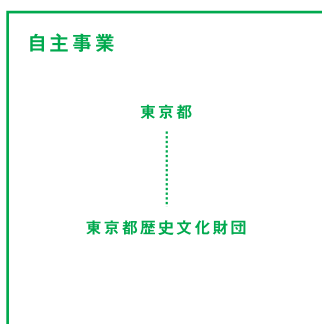
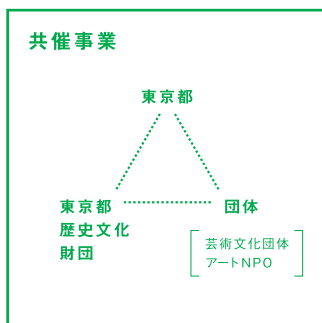
東京アートポイント計画の成り立ちと変遷

- | | |
|-------|---|
| 2006年 | 東京芸術文化評議会を12月に設立。オリンピック文化プログラムの検討開始 |
| 2008年 | 財団法人東京都歴史文化財団に、オリンピック文化プログラムを実施する組織として、東京文化発信プロジェクト室を4月に設立 |
| 2009年 | 1月、東京都がIOC（国際オリンピック委員会）に、2016年立候補ファイルを提出。いくつかの文化プログラムのひとつとしてプロジェクト「千の見世」（英訳「thousands knots」）が提案される |
| | 4月、東京文化発信プロジェクト室にて、東京都の文化政策として提案された「千の見世」を事業化し、「東京アートポイント計画」として始動 |
| | 10月、東京都が2016年オリンピック・パラリンピック競技大会招致に落選。以降、東京アートポイント計画は、東京都の文化政策として継続事業を展開 |
| 2013年 | 9月、東京都への2020年オリンピック・パラリンピック競技大会招致が決定 |

3. 事業の実施方法 | METHODS

東京文化発信プロジェクトは、芸術文化団体・アートNPO、自治体などと協働で行う事業を中心に展開している。東京都および東京都歴史文化財団と、NPOや自治体との共催、つまりこの3者が事業主催者という位置づけになる。

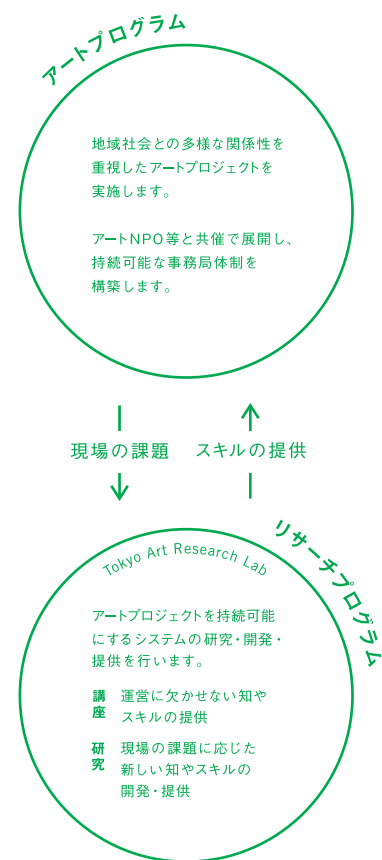
なお、都および財団の2者で実施している事業は「自主事業」と呼ぶ。



東京文化発信プロジェクト事業の実施形態

4. プログラム内容 | CONTENTS

東京アートポイント計画は、文化活動拠点を形成する「アートプログラム」と、その拠点の担い手となる人材の育成や、プロジェクト運営のための環境整備を行う「リサーチプログラム＝Tokyo Art Research Lab」を中心に展開。2つのプログラムの連携をより深め、相互にフィードバックをしながら事業を行っている。



東京アートポイント計画の2つのアプローチ

[資料]

東京アートポイント計画 2009 - 2013 事業一覧

2009年7月、東京アートポイント計画を始動してから2013年度までの5年分の全事業の一覧。おもに「アートプログラム」と「人材育成プログラム」の2本柱で進めてきた東京アートポイント計画がどのような変遷をたどってきたかを紹介する。

アートプログラム

2009年の発足とともに活動や団体のリサーチを開始し、2010年度にかけてプロジェクトの立ち上げを急ピッチで進めた。2011年度は、東日本大震災を受け、なぜ文化事業を行うのかについて改めて問い直すところから始まる。新たに市区町村といった基礎自治体との連携をスタートさせ、規模の大きなプロジェクトも増加した。2012年度、継続プロジェクトのなかには、プラットフォームの構築やドキュメント（記録冊子や報告書）などの成果を残し、終了の検討に入る事業も出始めた。その一方で、共催事業における個人情報漏洩事故が発生し、急務の対応として、2013年度は、共催NPOの体制づくりを強化する取り組みに重点を置いた。また初期3年を終えた事業は、プロジェクトの定着を支援するフォローアップ事業を展開した。

2009年度開始事業

TERATOTERA (2009-)

○2009年度

JR 吉祥寺駅から高円寺駅区間を対象エリアとしてプロジェクトが始動。TERATOTERA という名称は、〈寺〉と〈寺〉を結ぶ（高円（寺）to 吉祥（寺）、あるいは TERA=大地、地球をつなげる）という意味。2010年2月に説明会「はじまりの日」を実施し、3月に初の公開イベント「お披露目の日」を開催し、プロジェクトをスタートさせた。

共催＝一般社団法人 TERATOTERA /会場＝吉祥寺いせや、CAFE ZENON

○2010年度

吉祥寺駅～高円寺駅区間のアートを会場に「途中下車の旅」と称したトークショーやパフォーマンスなどのプログラムを vol.1 から vol.7 まで実施。2011年2月には活動1周年を記念し、TERATOTERA 祭り「おおとよしで 井の頭公園 船上ライブ」を開催し、約2500人が集まる。ボランティアスタッフ「TERAKKO (テラッコ)」の募集も開始した。

共催＝一般社団法人 TERATOTERA /会場＝JR 高円寺駅～吉祥寺駅間を中心とした杉並区、武蔵野エリア

○2011年度

2011年10月20日から11月4日に吉祥寺を舞台に「TERATOTERA 祭り」を開催。メインテーマは“post”。“～以降の”、“～の次の”を意味する接尾辞であり、そのことばを用いて、東日本大震災以降のアートや表現のあり方を探るといったメッセージを打ち立てた。総勢40組以上のアーティストが参加し、多彩なパフォーマンスを展開。企画の準備から

運営までをTERAKKOが担った。また、地域にゆかりのあるゲストを招いたトークショー「TERATOTERA FORUM」を西荻窪、吉祥寺、阿佐ヶ谷にて実施。そして、ウェブプログラムとして「コラム途中下車の旅」を開始した。

共催＝一般社団法人 TERATOTERA /会場＝JR 高円寺駅～吉祥寺駅間を中心とした杉並区、武蔵野エリア / 発行物＝「TERATOTERA 祭り DOCUMENT」

TERATOTERA 祭り特別企画「TOKYO-FUKUSHIMA」

東日本大震災によって被災した福島県で活動を開始した「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携し、東京から福島を発信するため、シンポジウムやライブなどを実施。福島から約30人を招き、アーティスト、一般参加者を含めた総勢200人の「オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!」は、音楽家・大友良英の指揮のもと、井の頭公園で演奏を行い、3000人を越す観客が集まった。

共催＝一般社団法人 TERATOTERA /会場＝井の頭恩賜公園、武蔵野公会堂、パウスシアター、アトレゆらぎの広場、武蔵野市立吉祥寺美術館

○2012年度

活動エリアを国分寺駅区間まで拡大。国分寺から吉祥寺を「ウエスト・テラ」として「途中下車の旅」のトークショー、ライブ、展示などを実施。吉祥寺から高円寺を「イースト・テラ」とし、メインテーマに「NEO 公共」を掲げ、「TERATOTERA 祭り」を実施。2012年9月から11月にかけて各駅周辺でライブ、屋外展示、シンポジウム、まちなか映像祭 (TEMPO de ART) をリレー形式で行った。テラッコの活動として「TERAKKO 通信」の発行、人材育成プログラム「アートプロジェクトの0123 (オイッチニーサン)」（Tokyo Art Research Labの一環として実施）を吉祥寺で開催した。

会場＝JR 高円寺駅～国分寺駅間を中心とした杉並区、武蔵野・多摩エリア / 発行物＝「TERAKKO 通信 2012 Document」

○2013年度

人材育成に力を入れ、事務局スタッフ向けのプログラム「TERAの穴」を開始。TARL 講座「アートプロジェクトを456 (仕込む)」では受講生企画として2014年2月に三鷹駅周辺にて2日間の特別企画「Civic Pride」を開催。2013年10月に開催した「TERATOTERA 祭り」ではメインテーマとして「commit」を掲げ、テラッコ主導によりトークショー、西荻窪店舗にてパフォーマンス、展示などを行う「TEMPO de ART 2013」を実施した。

共催＝一般社団法人 Ongoing (一般社団法人 TERATOTERA から名称変更) /会場＝JR 高円寺駅～国分寺駅間を中心とした杉並区、武蔵野・多摩エリア / 発行物＝「テラッコ vol.1～7」『TERATOTERA 祭り@西荻窪 TEMPO de ART 2013 Document』「TERATOTERA 2013 “commit” ドキュメント / TERATOTERA の作り方」



加藤翼「いせや CALLING」(「TERATOTERA 祭り」での引き興しの様子)、TERATOTERA、2012年

川俣正・東京インプログレス (2009-)

○2009年度：川俣正 東京トークシリーズ「東京を考える、語る」

「東京」という茫漠な言葉に潜む多様なテーマを採掘し、「東京」の新しいイメージを構築することを目的とした4日間のトークシリーズ。美術家・川俣正が、今福龍太（文化人類学者）、吉見俊哉（社会学者）、高山明（演出家/Port B主宰）、羽藤英二（都市工学研究者）、桂英史（メディア論者）、隈研吾（建築家）の6名の識者と対話し「東京」を語るためのキーワードを抽出。このトークをもとに、翌年度「川俣正・東京インプログレス」のコンセプトをまとめたプロポーザルブックが制作され、事業として発展していった。

主催＝東京都、東京文化発信プロジェクト室（財団法人東京都歴史文化財団）／会場＝アーツ千代田3331

川俣正・東京インプログレス—隅田川からの眺め

○2010年度

世界各地でインターローカル（地域間）プロジェクトを展開する川俣が、急速に景観の変貌をとげる東京に仕掛けるプロジェクトとして始動。昭和の面影を色濃く残しつつも、新興住宅が立ち並び再開発地域、荒川区南千住・汐入エリアで実施。小学生対象のワークショップや、アートプロジェクト制作現場でのスキルを磨く「アートコンストラクター講習会」を開催。徐々に人々を巻き込みながら、世界最高峰技術を駆使した東京スカイツリー（高さ634m）建設現場の対岸で、木造手づくりの物見台制作に着手。いまそこにしかない景色や時間を参加者と共有しながら、公開制作ワークショップ「塔を建てる」を経て、2011年3月20日、都立汐入公園に物見台「汐入タワー」（高さ約11m）を完成させた。

共催＝一般社団法人CIAN／会場＝都立汐入公園（荒川区）／発行物＝『川俣正・東京インプログレス—隅田川からの眺め〈プロポーザル 06/2010〉』『川俣正・東京インプログレス—隅田川からの眺め ドキュメント2010』（冊子）

○2011年度

東日本大震災の発生を受け、プロジェクトはその後の方針を議論するところから始まった。「東京の風景を考える」という本来のテーマとあわせ、日本の首都「東京」から震災との関わりを考えながら事業を進めていった（関連プログラムとして、Art Support Tohoku-Tokyoの一環で岩手県にてワークショップを実施）。中央区・佃エリアを実施拠点とし、地域の住民との意見交換を経て、東京の水辺から風景を眺めるための2つ目の物見台としてテラスを制作することに決定。公開制作には、近隣の小学生や主婦などが多く参加した。2012年3月20日に、中央区立石川島公園バリ広場に木造高さ約5mの「佃テラス」を完成させた。

共催＝一般社団法人CIAN／会場＝都立汐入公園（荒川区）、区立石川島公園（中央区）／発行物＝『プロポーザル2011 川俣正・東京インプログレス』（ポスター）

○2012年度

3つ目の物見台として、隅田川河口付近にある都立春海橋公園に都内の家屋廃材を利用したドームを制作。公開制作を経て、2012年10月27日に高さ約12mの「豊洲ドーム」を完成させた。その後、東京の水辺に建設した3つの物見台（「汐入タワー」「佃テラス」「豊洲ドーム」）を巡るクルージングツアーを実施。船内では、アートディレクターの北川フラムと川俣正の水辺に関わる議論が繰り広げられた。

共催＝一般社団法人CIAN／会場＝都立汐入公園（荒川区）、区立石川島公園（中央区）、都立春海橋公園（江東区）、隅田川エリア／発行物＝『川俣正・東京インプログレス ドキュメント2011』『川俣正・東京インプログレス—隅田川からの眺め 3つの物見台、オープン』

○2013年度

3つの物見台を巡り、水辺の風景を起点に東京について考えるためのプログラムを展開。3塔を巡るバスツアー「リバーサイドツアー」（全3回）では、ダンサーの酒井幸菜、音楽家集団の表現（Hyogen）、アーティストの佐藤悠をゲストに招き、作品の公開制作を実施した。東京の水辺を巡るそれぞれの体験をもとに「クルージングイベント」にて作品が発表された。ウェブサイトでは「プロジェクトレビュー」のページを設置し、物見台を巡った人々の寄稿文や動画投稿などの情報を集約。様々な視点からプロジェクトを切り取る試みを行った。11月4日をもって「佃テラス」と「豊洲ドーム」の公開を終了し、当初の予定どおり解体撤去。「汐

入タワー」は地域の要望等により継続設置となった。3年間にわたる活動をまとめたドキュメントを制作。

共催＝一般社団法人CIAN／会場＝都立汐入公園（荒川区）、区立石川島公園（中央区）、都立春海橋公園（江東区）、隅田川エリア／発行物＝『川俣正・東京インプログレス—隅田川からの眺め ドキュメント』



「豊洲ドーム」、川俣正・東京インプログレス—隅田川からの眺め、2012年

アーティスト・イン・児童館 (2009-2013)

○2009年度

子供とアーティストが出会う場をつくりだす試みとして、児童館にアーティストを招聘し、創作・表現のための「作業場」として活用するプロジェクト。東大泉児童館にて、アーティスト・西尾美也による「ことばのかたち工房」と、アーティスト・北澤潤による「児童館の新住民史」を実施。一連の活動を通して、児童館で遊ぶ子供と児童館を訪れる大人の新しい関係を生み出すことを目指した。また、子供・アート・地域をテーマとしたトークイベント「オープンミーティング」も開催した。

共催＝アーティスト・イン・児童館実行委員会／会場＝練馬区内児童館および周辺エリア／発行物＝『アーティスト・イン・児童館 西尾美也プロジェクト ことばのかたち工房 制作記録集2008-2009』

○2010年度

小学生を対象に、西尾美也の「ことばのかたち工房」（東大泉児童館）を継続実施。新たな取り組みとして、中高生の居場所づくり事業「なかなかTIME」を実施する中村児童館での活動を開始。アーティストユニット・Nadegata Instant Party（中崎透＋山城大督＋野田智子）を招聘し、中高生と作品プランを考えるリサーチプロジェクト「Let's Research for Tomorrow」を6カ月にわたり展開。作家による慎重なリサーチのもと、児童館の子供達や地域を巻き込むプロジェクト「全児童自動館」を構想。

共催＝アーティスト・イン・児童館実行委員会／会場＝練馬区内児童館および周辺エリア／発行物＝『アーティスト・イン・児童館 北澤潤プロジェクト児童館の新住民史手記を辿る』『アーティスト・イン・児童館 コンセプトブック [READ] [LOOK]』

○2011年度

西尾美也「ことばのかたち工房」の3年間の活動を紹介する展覧会を開催。プロジェクトの発展版として、ファッションデザイナーやパタンナーなども参加し「ことばのかたち工房 Proj」や「Form on Words by Yoshinari Nishio FASHON SHOW」を行った。アーティスト・山本高之によるプロジェクトでは、参加を希望する児童館3館を募集。子供たちとともに映像作品「CHILDREN PRIDE」「きみのみらいをおしえます」「まちのみなさんありがとう」を制作した。Nadegata Instant Partyは中村児童館を舞台に、中高生と協働で児童館のオリジナル文化祭をつくり、その様子をドキュメンタリー映画に収める、という一連の活動を通し、児童館に集う子供たちを巻き込んだ大掛かりなプロジェクト「全児童自動館」を展開した。共催＝アーティスト・イン・児童館実行委員会／会場＝練馬区内児童館および周辺エリア

○2012年度

主催団体であるアーティスト・イン・児童館が特定非営利活動法人として法人格を取得。劇団・快快(FAIFAI)を招聘し、3つの児童館が連携して演劇を制作・公演する「Y時のはな・イン・児童館」や、児童館の広報活動を子供たちとともに考え実践する「放課後メディアラボ事業」を中心に、練馬区内の児童館職員、小中高生、アーティストが交流・協働し、企画をつくり出すことができる場づくりやネットワーク構築を目指し展開した。共催＝特定非営利活動法人アーティスト・イン・児童館、練馬区教育委員会／会場＝練馬区内児童館および周辺エリア

○2013年度

練馬区の児童館にて、子供の放課後における多様な課題に対応するアートプログラムの企画立案および実施を可能にするための事業モデルの構築を目的とした「放課後アートプラン」を実施。「子供の居場所づくり」の必要性を背景に、共催間での検討会議や、企画コーディネーターという新たな職能をもつ人材を育成するための設計、先行事例のリサーチなどに取り組んだ。児童館職員や子供たちと協働で進める企画づくりや実施のための実践現場として、参加児童館を公募。名乗りを上げた4館とともに、協議を重ねながら事業の検討を行った。共催＝特定非営利活動法人アーティスト・イン・児童館、練馬区教育委員会／会場＝練馬区内児童館および周辺エリア

墨東まちな見世 (2009-2013)

○2009年度：墨東まちな見世 2009

隅田川の東に広がる墨東エリアにて、地域の生活を文化として活かすプロジェクトを展開。「まちが遊ぶ100日間」をテーマに17組のアーティストらによる企画を実施した。広報活動等のために制作された「墨東まちな見世インフォメーション屋台」がまちなかで活躍した。地域に入りプログラムを展開するために必要な期間を100日と設定し企画された招聘プログラム「100日プロジェクト」では、劇作家の岸井大輔が「墨東まちな見世ロビー」を実施。アーティストの大巻伸嗣は、「Memorial Rebirth in 京島・キラキラ橋商店街」を行った。初年度を終えて、規模の大きなアートプログラムではなく、小規模でより地域に根差したプログラムの実施が適しているエリアであることを確認した。共催＝特定非営利活動法人向島学会／会場＝墨東エリア（おもに曳舟、京島、東向島、八広、押上エリア）／発行物＝「墨東まちな見世 2009 活動報告書」

○2010年度：墨東まちな見世 2010

通年展開を意識した企画会議や事務局の立ち上げを行う。「ハロー、ニュートキーヨー！」をテーマに、「まちをひらく」「まちをつなぐ」「まちを語る」という3つの柱でプロジェクトを展開。「100日プロジェクト」など招聘プログラムでは池田光宏「by the Window “墨東バージョン”」、山城大督「トーキーヨー・テレバシー」、長島確「墨田区在住アトレウス家」の3つのプログラムを実施。20のネットワークプロジェクトや、「墨東まちな見世塾」「墨東まちな見世さんば」シリーズを展開した。共催＝特定非営利活動法人向島学会／会場＝墨東エリア／発行物＝「墨東文庫『京島編』墨東ストーリーズ解説目録」

○2011年度：墨東まちな見世 2011

「気がつけば、お向かいさんはアーティスト」をテーマに、まちなち定着した多様な文化的活動の連鎖やアートとコミュニティとの創造的な共生から見えてくる、新しい東京・下町のイメージの提示を目指したプログラム展開を図った。「100日プロジェクト」では谷山恭子「Lat/Long-project “I'm here. ここにいるよ。”」を公園や商店などエリア内各所で実施した。共催＝特定非営利活動法人向島学会／会場＝墨東エリア／発行物＝「墨東文庫『鳩の街編』墨東ストーリーズ解説目録」

○2012年度：墨東まちな見世 2012

エリアの新旧アート拠点やプロジェクトとの連携活動を通年化した。ネットワーク形成を可視化させるため「BOKU-to-Teku Teku まちみてマップ」を作成する。「100日プロジェクト」では、新里碧が廃業した銭湯の廃材を利用し、エリア内の銭湯に「湯怪」として再生させる「曳舟湯怪」を展開した。「ネットワークプロジェクト」では、秋のメイン会期を中心に4つの特別企画とともに15の参加企画を同時開催した。4年間の活動成果をまとめたドキュメントを「墨東まちな見世編集部」とともに制作した。共催＝特定非営利活動法人向島学会／会場＝墨東エリア／発行物＝「墨田のまちとアートプロジェクト 墨東まちな見世 2009-2012 ドキュメント」『BOKU-to-TekuTeku まちみてマップ』(初版／第2版)

○2013年度：「墨東まちな見世」アートプラットフォーム

2009年度から2012年度まで継続展開したアートプロジェクト「墨東まちな見世」を通して墨東エリアに育まれた、アート拠点やネットワーク資源の持続と定着を目指すプロジェクト。マップの更新や英語版の制作、情報サイトの整備を通じて、エリアの多様な活動を支えるプラットフォームを形成した。また東京アートポイント計画のエリア型プロジェクトのショーケースとして国内外の視察を受け入れた。共催＝特定非営利活動法人向島学会／会場＝墨東エリア／発行物＝「BOKU-to-TekuTeku まちみてマップ」(第3版／English Version)

イザ! カエルキャラバン! in 東京 (2009-2011)

○2009年度

阪神・淡路大震災を契機に誕生した防災アートプログラム「イザ! カエルキャラバン!」を都内で広めていくため、特定非営利活動法人プラス・アーツ理事長の永田宏和を中心に拠点整備を行った。地域主導の防災訓練をベースに、震災時に必要な「知識」や「技」を身に付けることができるプログラムのデモンストレーションを実施するとともに、災害とアートをテーマとしたトークイベントも行った。共催＝特定非営利活動法人プラス・アーツ／会場＝墨田区立第一寺島小学校、アーツ千代田3331

○2010年度

東京ならではの新しい防災訓練および地域コミュニティを模索し、プログラムの担い手の公募を実施。町会や社会福祉協議会、NPOなどの地域主導の防災訓練をベースに、防災アートプログラムやシンポジウムを行った。共催＝特定非営利活動法人プラス・アーツ／会場＝都内各所／発行物＝『水害紙芝居 おおあめとぼくのゆめ』『イザ! カエルキャラバン! 防災体験プログラムマニュアルBOOK』

○2011年度

継続実施のあり方の検討や、高層マンションなどより東京に根差したテーマで防災アートプログラムを実施した。継続開催支援のほか、新規展開の導入となるワークショップやシンポジウム、公開ミーティング、教材開発などを行った。共催＝特定非営利活動法人プラス・アーツ／会場＝都内各所

岸井大輔プロジェクト「東京の条件」(2009-2011)

○2009年度

東京で新しい公共のモデルを試行する現代演劇プロジェクト。初年度は2010年1月から始動。「墨東まち見世2009」参加作品として、劇作家・岸井大輔が、商店街に住み込み、100日間ノンストップで運営した「墨東まち見世ロビー」の批評的記録をまとめた冊子「LOBBY」を制作した。その他、東京のまちなかにおける創作活動の担い手を育てることを目指し、ワークショップ「まちから創る」を実施した。

共催＝一般社団法人PLAYWORKS／会場＝都内各所／発行物＝「LOBBY はじまりの場を創る」

○2010年度

地域資源を生かしながら活動の担い手を増やすことを目的とした「会／議／体」シリーズと、その価値観や成果を顕在化させるフェスティバル「WORKS」や、創作ワークショップ「まちから創る」を実施。東京のアートプロジェクトの現場にふさわしいコミュニケーションの場を提示し、創発的な場を運営していくモデルをつくり出す試みを行った。

共催＝一般社団法人PLAYWORKS／会場＝都内各所

○2011年度

東京には情報共有や作品発表の場は多いが、その前段となる計画を練り、制作の試行を重ねるための場所が足りておらず、それゆえアートプロジェクトの継続は困難な状況にあるという考えのもと、プロジェクトを準備するための空間「準備室」をまちなかに設置した。地域コミュニティと若い世代が接点をもつ機会を創出した「こどもkichi 子育て地藏子供のたまり場準備室」、クリエイターやプログラムの試作品が多く生み出される場所「田原町共有作業場（「ふね」準備室）、24時間オープンし、教えたり、勉強したり、悩んだりすることができる場所「シェア大学(仮)準備室」を展開。それらの活動を、フリーペーパー「ゆっくり考えたい」にまとめた。共催＝一般社団法人PLAYWORKS／会場＝都内各所／発行物＝「ゆっくり考えたい」
*2013年度、東京アートポイント計画の自主事業として、「東京の条件」の3年間の活動記録『戯曲|東京の条件』（岸井大輔著）を発行。

Insideout/Tokyo Project (2009-2010)

○2009年度

「東京一地方」という関係性を逆転して考え、つなげることで新しい活動性やコミュニティ・ネットワークを構築することを目的とした。東京に住む人々が自らの属する地域性を新しく読み替えるきっかけを提供するトークイベントなどを実施。コマンドNの中村政人をディレクターに、運営はボランティアやインターンプログラム「シッカイ屋」のメンバーが行った。共催＝一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN／会場＝アーツ千代田3331／発行物＝「地にふれ今を描く Insideout/Tokyo Project vol.1」

○2010年度

日本全国の革新的な文化芸術活動を紹介するポータルアーツスペース「Insideout/Tokyo Project Room」を新設。全国の先行事例の運営者（小田井真美（Sapporo II Project）、高野織衣（ヒミング）、高田彩（ビルド・フルーガス）、日沼禎子（空間実験室）、高本敦基（勝山文化往来館ひしお）、渡辺智史（湯の里ひじおり）、佐々木隆幸（ゼロダテ）、新井慶太（キタミン・ラボ舎）、野田恒雄（紺屋2023））を招き活動を紹介するトークセッションを実施した。共催＝一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN／会場＝アーツ千代田3331



クルーズの様子、LIFE ON BOARD TOKYO 09-10、2009年

CET090718

○2009年度

アート・デザイン・建築の複合フェスティバル「セントラルイースト東京（CET）」とともに、東京アートポイント計画のキックオフイベントを2009年7月18日に実施。「東京R不動産」によるエリア散策や、今後の可能性を探るトークを開催し、劇作家・岸井大輔の「東京の条件」のプレゼンテーションを行った。

共催＝セントラルイースト東京実行委員会／会場＝神田・馬喰町・浅草橋・日本橋を結ぶ地域（CETエリア・会場）のオフィス、店舗、ギャラリーなど

LIFE ON BOARD TOKYO 09-10

○2009年度

東京の水辺の「今」を知り、身近な水辺の環境の将来を考えるとともに、水辺の文化の活性化を目的としたプログラムを実施した。「東京低地クルーズ」や、トークイベント「水辺をひらく アートでひらく」や、防災イベント「BO菜」を実施した。

共催＝一般社団法人ポर्टビープル・アソシエーション／会場＝都内河川など／発行物＝「LIFE ON BOARD TOKYO 09-10 水辺をひらく アートでひらく～都市の新たな水上経験～トークイベント記録集」

学生とアーティストによるアート交流プログラム (Student Artist Partnership)

学生が地域・社会の中でアーティストと交流し、協働しながら実験的・先進的なアートプロジェクトを実施する機会の提供を目的とするプログラム。アートプロジェクトに関する新たなシステムづくりや寄与するプログラムの展開も狙いと。大学と連携し、19事業を実施。

○2009年度

- ▶「アートと饗宴」―「シンポジウム＝情報共有・交換の場」の再開発―（共催＝東京造形大学造形学部）
- ▶学生とアーティストによるアウトリーチ（共催＝桜美林大学パフォーミングアーツ・インスティテュート）
- ▶感劇場2009（共催＝学習院女子大学）

- ▶ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト (共催=東京藝術大学/発行者=「谷中放談~アートのお仕事~記録集」『ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト 谷中妄想ツアー!! DVD』)
- ▶小金井国際彫刻シンポジウム (共催=東京学芸大学)
- ▶在日フランス大使館解体前アートプロジェクト「MEMENTO VIVERE / MEMENTO PHANTASMA」(共催=東京藝術大学)
- ▶千代田区秋葉原地域における全国芸術系学生交流拠点形成事業 (共催=東京藝術大学)
- ▶日大×藝大+mmp「戯曲をもって町へ出よう。」(共催=日本大学理工学部)
- ▶土方巽「病める舞姫」を秋田弁で朗読する (共催=慶応義塾大学/発行者=「土方巽「病める舞姫」を秋田弁で朗読する」)
- ▶ひののんフィクション (共催=首都大学東京/発行者=「ひののんフィクション記録集」)
- ▶「5+1ジャンクションボックス」展 (共催=多摩美術大学)
- ▶SHIBUYA STATION ART COMMONS (共催=青山学院大学)
- ▶TAMA VIVANT II「うさぎ穴はふさがれた」展 (共催=多摩美術大学)
- ▶Webを介した墨東エリア・のオンライン/オフライン情報環境の再デザイン (共催=東京都市大学)
- ▶WHAT AM I DOING HERE? (共催=明治大学/発行者=「WHAT AM I DOING HERE?」)
- ▶who you know? who knows you? (共催=女子美術大学/発行者=「video exchange program who you know? who knows you?」)

発行者=「学生とアーティストによるアート交流プログラム」パイロット事業 報告書
OPEN THEATRE MUSEUM」

○2010年度

- ▶「大学まち」のデザインをつうじた地域力の可視化に関する研究:「墨東大学」の実践と評価 (共催=慶応義塾大学・東京都市大学/発行者=「墨東大学の挑戦 メタファーとしての大学」)
- ▶NHK×学生 クロスメディアプロジェクト (共催=青山学院大学)
- ▶小金井110人のストーリー (共催=東京大学)

2010年度開始事業

ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト (2010-)

○2010年度

若き表現者や専門家、市民や学生など様々な立場でアートに関わる人々が日常的に集い交流するプラットフォームを谷中エリアに形成することを目指し、4つのプログラムを展開。アーティスト・きむらとろうじんじんによる「野点」(谷中霊園内こどもの広場)では、地域との関係を築きながら、プロジェクト実施のための許認可申請や人手集めに奮闘した。「芸術っ子」と呼ばれる若き表現者がまちなかに仕掛ける参加型パフォーマンスプログラム「谷中妄想ツアー!!茶会」や、活動拠点「はっち」(根津)の形成にも取り組んだ。こども創作教室「ぐるぐるミックス」1日体験教室も実施。※学生とアーティストによるアート交流プログラムより発展
共催=一般社団法人谷中のおかって/会場=台東区谷中界隈

○2011年度

きむらとろうじんじんの「野点」では、前年度に築いた地域との関係性のもと、公共空間だけでなく、私有地でのプログラム実施を試みた。「谷中妄想ツアー!!おしゃれ」では、前回のツアーの一般参加者がパフォーマーとして挑戦するなど、つくり手側として関わる層に広がりが見られた。下町情緒漂う夜のまち楽しむ「谷中妄想カフェ~ちようちんもってちよっとそこまで~」は、7月から9月にかけて全19回実施。まちの大人と子供の出会いをプロデュースすることも創作教室「ぐるぐるミックス」を本格始動させ、年間全18回のプログラムとして構築した。
共催=一般社団法人谷中のおかって/会場=台東区谷中界隈

○2012年度

「ぐるぐるミックス」は、実施体制拡充に重点をおき展開。「谷中妄想カフェ」では、無理のない運営のための仕組みづくりや、地域のボランティアの募集も積極的に行った。谷中エリアに根差す文化創造拠点を形成するための実験的試みとして、歴史的建造物である旧平櫛田中邸の活用方法について可能性を探る、ソフト事業の開発にも取り組んだ。「芸術っ子」をはじめ、本プロジェクトを通じて交流が生まれた地域内外の人々と連携しながら、平櫛邸に集う人々の特性を活かしたホームパーティ形式のパフォーマンス公演「どぞじんのいえ」を実施。プロジェクト全体の活動拠点を根津の「はっち」から、上野桜木の「木はっち」へ移した。

共催=一般社団法人谷中のおかって/会場=台東区谷中界隈

○2013年度

プロジェクトを担う一般社団法人谷中のおかっての事務局体制強化に力を入れるとともに、3年間のプロジェクトの活動を資産化する試みとして「アーカイブプロジェクト」を開始。プロジェクトで行ってきたことの言語化や、各種データの整理、これまでの参加者へのインタビューなどを実施し、それらを素材にドキュメントブックを制作した。「ぐるぐるミックス」では、事業案内パンフレットを制作するとともに、実施運営体制について検討を重ね、継続するために向き合わなくてはならない課題とその対策について考えた。

共催=一般社団法人谷中のおかって/会場=台東区谷中界隈/発行者=「ぐるぐるミックスコンセプトブック」『ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト 2010-2013』

としまアートステーション構想 (2010-)

○2010年度

豊島区文化政策推進プランのシンボルプロジェクトである「新たな創造の場づくり」のプログラムとして、人々が創造的にまちなかに関わる機会の提供を目指し、多様な文化創造活動が生まれるための仕組みづくりに取り組む事業として始動。準備年である初年度は構想メンバーとして参画した佐藤慎也(建築家)、西村佳哲(働き方研究者)、トム・ヴィンセント(Tonolooop代表)とともに、ハードを先行させない文化事業を構築することを目指し、事業のコンセプトづくりを行った。

共催=豊島区、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン/会場=豊島区

○2011年度

雑司が谷の喫茶店跡地に拠点「としまアートステーション[Z]」(以下、「Z」)を開設。「地域」「アート」「場づくり」をキーワードに、構想のための公開勉強会「Zの会」(全7回)を開催。美術家・藤浩志によるアートプロジェクト「Miracle Waterをつくる。」では、地域に潜在する活動の種をリサーチした。カフェユニット「L PACKによる[L AND PARK]」では「Z」を公園に見立て、様々な実験を展開。また「キッチンプロジェクト」として、食を通して地域を知るEAT & ART TAROの「ポトラックパーティ」としまや中山晴奈のディレクションによる「食べるを分解する」も実施した。

共催=豊島区、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン/会場=豊島区内各所

○2012年度

雑司が谷の「Z」にて開催した、ひびのこづえ(コスチュームアーティスト)「虫をつくるワークショップ」では、10カ月にわたり、月1回、虫のブローチづくりの場を継続して開催することにより、ふらっと立ち寄れる拠点としてのあり方について模索した。劇作家・岸井大輔による「TAbble」は、豊島区に潜在する可能性を話し合うため、人々が集う「テーブル」を探し、つくり、考える演劇プロジェクトとして展開。まち歩き「界に立つ」、調査や勉強会として「diVISION」、「豊島区界」を実施。地域や社会における「子育て」をテーマに阿部初美による「としまで子育て~子育てを考えるワークショップ」や、西村佳哲によるZの会特別企画「ともに生きる技術」(全3回)を開催した。

共催=豊島区、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン/会場=豊島区内各所/発行者=『としまアートステーション構想リーフレット2012』『としまアートステーション構想コンセプトブック』『子育てをめぐるとの対話』としまで子育て 子育てを考えるワーク

ショップ」ドキュメント]

○2013年度

構想から4年目を迎え、プロジェクト第2期の準備年として始動。実施事務局を担う団体として、一般社団法人オノコロが新たに参加。豊島区内の魅力あふれる場所で地域資源を活用し、当事者として主体的にアート活動を行う人々を生み出すための「構想」を具体的に実行することを目指し事業に取り組む。「Z」では、地域のアート活動や文化情報に触れられる交流の場「ふらっとカフェ」を運営。まちなかでは、岸井大輔を中心とした、カンパニーふるまいによる「としまのふるまい」や作曲家・安野太郎による音楽実験「安野太郎のとしまZステーション」を展開した。

共催＝豊島区、一般社団法人オノコロ／会場＝豊島区内各所

アトレウス家シリーズ (2010-2012)

○2010年度：墨田区在住アトレウス家

演出家／ドラマトゥルク・長島確による演劇プロジェクト。ギリシャ悲劇に登場する家族の物語を、実在のまぢや建物にインストールすることにより、家や住まいや暮らしについて考える。墨田区内で空き家を借り、そこにギリシャ劇の一家がかつて暮らしていたという設定で作品を制作。実際の家屋のディテールを手がかりに、アトレウス家の親子三代にわたる生活を具体的に想像し、数々の事件の痕跡をたどった。地域の人たちの参加・協力のもと、読書会やフィールドワークを重ねながら、インスタレーションと演劇の間をさぐる作品につくり上げた。※「墨東まぢ見世2010」の一環として実施／学生とアーティストによるアート交流プログラム「戯曲をもって町へ出よう。」より発展した事業

共催＝特定非営利活動法人向島学会／会場＝旧アトレウス家他、東向島エリア／発行物＝「The House of Atrous, Sumida-ku, Tokyo」

○2011年度：豊島区在住アトレウス家

雑司が谷にて、住む家を失った家族が一時的に暮らした建物とまぢ、という設定のもと上演。コミュニティラジオ「Atrous Tune」の放送も行った。人材育成プログラム「アトレウスの学校」ではプロジェクトの構造について考えるゼミを開催した。

共催＝特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン／会場＝千登世橋教育文化センター、としまアートステーション「Z」／発行物＝「The House of Atrous, Toshima-ku, Tokyo」

○2012年度：三宅島在住アトレウス家

火山と共生する三宅島（東京都三宅村）にアトレウス家が移住するためのリサーチとシミュレーションを行った。都心にながら島を創造する「山手篇」、実際に島を訪れ未来を思う「三宅島篇」の2部構成で実施。移動型コミュニティラジオの放送や、三宅島と山手線をオーバーラップさせた、島のスケールを実寸大でイメージできる地図を作成した。アトレウスの学校の発展版として「構造茶話会—プロジェクト構造論」を実施。長島確、佐藤慎也がコーディネーターを務め、熊谷保宏（日本大学教授）、野村政之（ドラマトゥルク、制作）がレギュラーメンバーとして参加した。3年間の活動記録として「アトレウス家の建て方」を発行。

共催＝一般社団法人ミクストメディア・プロダクト／会場＝旧平櫛田中邸、カフェ 691 他／発行物＝「アトレウス家の建て方」

ひののんフィクション (2010-2011)

○2010年度

森林におおれた旧蚕糸試験場日野桑園跡「自然体験広場」を舞台に、広場を利用する活動団体とアーティストのコラボレーションのもと、奥建祐+鈴木雄介「造山プロジェクト」、wah「見えない森」、中山晴奈「EDIBLE FOREST (食べられる森)」の4つのアートプログラムを実施。大巻伸嗣「Memorial Rebirth」。それらの活動を通して、非日常の体験を共有する場を生み出し、新たな文化的生活空間の構築を目指した。※学生とアーティストによるアート交流プログラムより発展した事業

共催＝ひののんフィクション実行委員会／会場＝旧蚕糸試験場日野桑園跡「自然体験広場」／発行物＝「ひののんフィクション2010ドキュメント」

○2011年度：ひののんフィクション2011

プロジェクト実施の舞台となる「自然体験広場」は、多目的ホールの完成に伴い、森から公園に変わることとなった。開放が制限されていた広場は、公園化とともに全ての人に開放されることになる。それに伴い4組のアーティスト (wah document、中山晴奈、楠原竜也、荒神明香) とともに、ワークショップやフィールドワークを行いながら、広場の新たな活用の可能性を探った。3月には各アーティストによる発表「プロジェクトプレゼンテーション」を行った。

共催＝ひののんフィクション実行委員会／会場＝仲田公園「自然体験広場」／発行物＝「ひののんフィクション2011ドキュメント」

学生メディアセンター なないろチャンネル

○2010年度

ウェブテレビ放送局という設定のもとに、代表・冠那菜奈など美術系の学生を中心とする参加者がUstreamやTwitterを活用したクロスメディアコミュニケーションのあり方を検証した。アーツ千代田3331内に拠点を置き、都内及び全国のアート活動の現場を取材し、さらには「なないろフェスティバル」などの独自イベントも実施した。

共催＝一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN／会場＝アーツ千代田3331／発行物＝「ななチャンネルドキュメント2010」〈DVD〉

2011年度開始事業

アートアクセスあだち 音まち千住の縁 (2011-)

○2011年度

「音」をテーマに、住民参加型のアートプログラムの実施を通じて、様々な「縁」を結ぶことを目指した。初年度は足立区制80周年記念事業の準備として展開。音楽家・足立智美は東京都中央卸売市場足立市場を舞台に「ぬお—チューバと自動車と器楽、合唱のための魚市場 ねがま鍋付」を、音楽家・大友良英は荒川河川敷を舞台に「空飛ぶオーケストラ大実験—千住フライングオーケストラお披露目会」を、アーティスト・大巻伸嗣は「Memorial Rebirth 千住いろは通り」を、作曲家・野村誠は銭湯にて「野村誠ふるデュース 千住だけじゃれ音楽祭—風呂フェッショナルなコンサート」を実施した。

共催＝東京藝術大学、特定非営利活動法人やるネ、足立区／会場＝足立区千住地域

○2012年度

足立区制80周年記念事業を契機に、足立智美、大友良英、大巻伸嗣、野村誠の4人の継続アーティストに加え、スブツニ子!、八木良太、やくしまるえつこ、ASA-CHANGを新たに迎えた。6週間のメイン会期を中心に、「音」をテーマとしたアートプログラムを魚市場や荒川河川敷など地域に縁のある多様な会場で展開した。

共催＝東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人やるネ、足立区／会場＝足立区千住地域

○2013年度

継続展開のための基盤整備に取り組んだ。大友良英「千住フライングオーケストラ 縁日」、大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住2013 常東」、野村誠「千住だけじゃれ音楽祭」の継続プログラムに加え、「イミグレーション・ミュージアム・東京—不思議な出会い」「千住ミュージックホール」「未来楽器図書館」なども実施。Tokyo Art Research Labの「音の記録研究」と連動し、前年度の活動をもとに記録の方法も探った。

共催＝東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人やるネ、足立区／会場＝足立区千住地域／発行物＝「アートアクセスあだち 音まち千住の縁 2011-2013 ドキュメント」



大友良英「千住フライングオーケストラ」、アートアクセスあだち 音まち千住の緑、2012年

小金井アートフル・アクション! (2011-)

○2011年度：小金井アートフル・アクション! S&G

小金井市芸術文化振興計画推進事業として2009年に始まった事業「小金井アートフル・アクション!」の組織の成長を目指し始まった事業。浅井裕介「植物になった白線@小金井」、岩井成昭「イミグレーション・ミュージアム・東京」、[ほうほう堂@小金井のあちこちの窓]の3つのプロジェクトについてトーク、展示、公演を実施。若手アーティストの発掘と支援を目的とした「Redzone」では公開ミーティングや展示を行った。※学生とアーティストによるアート交流プログラムより発展した事業

共催＝小金井アートフル・アクション! 実行委員会 / 会場＝小金井アーツポット シャトー2F、小金井市内各所

○2012年度

アーティスト、父母、園職員などと協力し、保育園で卒園制作事業を実施。小金井市内の小学校2校では、アーティスト(浅井裕介、岩井優)が子供たちと共同制作を行った。企画運営を市民スタッフが担う「市民による現代アート入門講座」も6回開催。2013年3月にそれぞれのプロジェクトの成果展示と議論を深める12セッションのトークを実施した。

共催＝特定非営利活動法人アートフル・アクション、小金井市 / 会場＝小金井市立さくら保育園、小金井市立本町小学校、小金井市立南小学校、小金井アーツポット シャトー2F、小金井市民館、studioM、小金井市民交流センター

○2013年度

保育園での事業は2園(新規1園)に拡大し、小学校2校(新規1校)との連携事業も継続実施。現場の事業を文化政策と結びつけて議論するための講座を3回開催。NPO法人アートフル・アクションが行う事業を素材に、外部ゲストを招き、その意義を議論した。2014年3月には成果展示とディスカッションを実施した。

共催＝特定非営利活動法人アートフル・アクション、小金井市 / 会場＝小金井市立さくら保育園、小金井市立くりのみ保育園、小金井市立本町小学校、小金井市立前原小学校、小金井市民会館、小金井市役所、小金井市民交流センター



浅井裕介「植物になった白線@小金井」、小金井アートフルアクション! S&G、2011年 Photo: Hitomi Uranaka

東京事典 Tokyo Jiten (2011-2013)

○2011年度

「東京」を象徴する語彙を集めた映像による事典をウェブ上に構築するプログラム。アーティスト、編集者、建築家、ミュージシャン、また一般公募からの参加者18名をゲストに招き、「東京」を象徴するキーワードについて15分間のプレゼンテーションを公開で録画し、ウェブサイト(tokyojiten.net)に掲載した。※「Tokyo Art School」(人材育成プログラムの一環として実施)より発展した事業

共催＝特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ【AIT/エイト】 / 会場＝AIT ROOM

○2012年度

「100年後の東京」をテーマとし、プレゼンテーションの公開録画、出張プレゼンテーションや特別公開録画などを実施。29名のプレゼンターによる発表をウェブに掲載した。プレゼンテーションのスキルアップのためのワークショップも実験的に行った。

共催＝特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ【AIT/エイト】 / 会場＝AIT ROOM

○2013年度

東京事典に構築されたプレゼンテーションをより広く発信するため、インターネット動画共有サイトYoutubeに「東京事典」チャンネルを作成し、アーカイブ化を開始。3年間の活動の総括として、ゲストにアンドリュー・マーケル(エディター)、兼松芽永(芸術人類学)、毛利嘉孝(社会学者)を招き、「東京事典ラウンドテーブル『Towards a Spectacular Criticality? -東京、ダイジョウブ?-』」を開催。

共催＝特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ【AIT/エイト】 / 会場＝AIT ROOM

三宅島大学 (2011-2013)

○2011年度

伊豆七島の一つである三宅島全体を大学に見立てて、地域資源を活用した様々な「学び」の場を提供する仕組みづくりを行った。初年度は日比野克彦をはじめとするアーティストや慶應義塾大学の加藤文俊研究室による地域資源のリサーチを目的としたプログラムを展開し、9月に三宅島大学を開校した。

共催＝三宅島大学プロジェクト実行委員会／会場＝三宅島各所／発行＝「三宅島大学 平成23年度大学案内」

○2012年度

「島でまなび、島でおしえ、島をかながえる。」というコンセプトに沿って、島内外の様々な人が講師となり、島の地域資源を活かした講座を展開した。また、島内に交流拠点(三宅島大学本校舎)を整備し、定期講座の実施や加藤文俊研究室によるリサーチ、五十嵐靖晃の「そらあみ」や開発好明の「100人先生」などアーティストの滞在制作の場として活用した。またニュースレター『三宅島大学通信』の発行や、常駐マネージャーのブログなど情報発信に注力した。

共催＝三宅島大学プロジェクト実行委員会、三宅村／会場＝三宅島各所／発行物＝『三宅島大学平成24年度大学案内』『三宅島大学通信(8月号-3月号)』『誰もが先生、誰もが生徒 三宅島大学の試み 五十嵐靖晃「そらあみ—三宅島—」を事例に』

○2013年度

本校舎を拠点に、定期講座や継続的なプログラムを実施した。地域資源である島内の施設を活用した「三宅島大学ポルダリングカップ2013」の実施や、加藤文俊研究室の「三宅島ポスタープロジェクト展」、三宅島の明日について語る瓦版『あしたばん』の50号発行、開発好明の「100人先生」の100人達成に加え、卒業生2名の輩出など3年間の成果を残し、3月に閉校式を迎えた。

共催＝三宅島大学プロジェクト実行委員会、三宅村／会場＝三宅島各所／発行物＝『三宅島大学 平成25年度大学案内』『三宅島大学通信(5月号-3月号)』『三宅島大学通信全集』『あしたばん全集』『三宅島ポスタープロジェクト』『開発好明 100人先生』『五十嵐靖晃 そらあみ-三宅島- 帰島式』『山城大督 三宅島映像プロジェクト [VIDEO LETTERS] ビデオレター:7年後の「わたし」へ』



近藤良平「溶岩ダンスワークショップ」、三宅島大学、2011年

公園プロジェクト (2011-2012)

○2011年度

渋谷区にある代々木公園では、原宿門前広場の改修工事に伴い、公園の顔としてふさわしい空間を創出することを目指し、アーティスト・浅井裕介がワークショップ形式で公開制作する「植物になった白線@代々木公園」を実施した。地域住民や公園を訪れた人々とともに、白線でかたちづけられた様々な植物や小人などが地面に焼き付けられた。汐入公園では「川俣正・東京インプログレス」の「汐入タワー」の竣工1周年を記念し、子供から大人まで参加できる参加型プログラム「汐入タワーとあそぼう」を実施。セノグラフィ、ダンス、音楽に関わるアーティストとともに、楽器を創り、踊り、タワーの飾り付けを行った。

共催＝特定非営利活動法人S.A.I.、公益財団法人東京都公園協会／会場＝都立代々木公園、都立汐入公園

○2012年度

「植物になった白線@代々木公園」に植物や動物を付け加えるワークショップ「植物になった白線@代々木公園—手入れの日—」を実施し、公園の憩いの空間を表情豊かに変えた。目黒区にある林試の森公園では、公園でのアートプロジェクトについてのリサーチプロジェクトを実施した。

共催＝特定非営利活動法人S.A.I.／会場＝都立代々木公園、都立林試の森公園

Scramble Crossing of Art「明日の神話」プロジェクト

○2011年度

渋谷駅構内に岡本太郎の「明日の神話」が設置されたことがきっかけとなり始まった渋谷芸術祭との連携のもと、アートによる震災復興活動を広く発信した。アーティスト・日比野克彦監修のもとに青山学院大学や東京藝術大学の学生とともに実施した。

共催＝特定非営利活動法人渋谷・青山景観整備機構／会場＝渋谷駅周辺ほか／発行物＝『Scramble Crossing of Art 渋谷芸術祭関連事業 明日の神話プロジェクト』

ストリートペインティング・プロジェクト「見てみて☆見ないで」

○2011年度

建造物の壁面や仮囲いを新進若手アーティストによる作品発表の場として活用することを目的とし、改修中の文化施設仮囲いにアート作品を設置。東京芸術劇場前の工事仮囲いにアーティスト・福士朋子による壁画作品を展開。

共催＝特定非営利活動法人アーツインシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]／会場＝東京芸術劇場仮囲い壁

2013年度開始事業

長嶋確のつくりかた研究所：だれかのみたゆめ

○2013年度

3年にわたる演劇プロジェクト「墨田区／豊島区／三宅島在住アトレウス家」で得たノウハウを利用しつつ、近年増加傾向にあるアートプロジェクトにおける、既存の方法論ではカバーしきれないジャンル横断・異種混交的な「つくりかた」自体を発明・検証するプロジェクト。「長嶋確のつくりかた研究所」を立ち上げ、公募した若手研究員とともに、研究を進めた。

共催＝一般社団法人ミクストメディア・プロダクト／会場＝都内各所

*

東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業 (Art Support Tohoku-Tokyo)

○2011年度

東日本大震災の発生を受けて、「東京緊急対策2011」の一環として2011年7月に事業を開始。岩手県、宮城県、福島県の3県を対象に、東京アートポイント計画の手法を用いて、現地のパートナーとなる団体やコーディネーターとともにプログラムの立案と実施を行った。仮設住宅や集会所、仮設商店街など被災地の生活圏において、3県で19プロジェクトを展開した。共催＝特定非営利活動法人いわて連携復興センター、えずこ芸術のまち創造実行委員会、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ／会場＝岩手県、宮城県、福島県／発行物＝『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2011』『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2011 (EN)』『福島大風呂敷／FUKUSHIMA! O-FUROSHIKI DOCUMENT』『MIYAGI REPORT 2011-2012 10のプロジェクトとシンポジウム』

○2012年度

3県で18プロジェクトを展開。現地自治体とも共催で事業を実施した。岩手県大槌町^{おまつちよう}では芸術文化による復興のための人材育成事業「ひよこりひょうたん塾」、宮城県と芸術銀河2012×Art Support Tohoku-Tokyo「なんのためのアート」、福島県と「福島芸術計画×Art Support Tohoku-Tokyo」を全県的に展開した。

共催＝特定非営利活動法人いわて連携復興センター、えずこ芸術のまち創造実行委員会、特定非営利活動法人NPO西会津ローカルフレンズ、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、宮城県、福島県／会場＝岩手県、宮城県、福島県／発行物＝『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2012』『鶴島神楽と水門』『なんのためのアート』『見る、聞く、話す、感じる、そして考える。』『ひよこりひょうたん塾 2012年度 活動報告書』『福島芸術計画×Art Support Tohoku-Tokyo 2012』

○2013年度

3県で14プロジェクトを展開。引き続き、福島県と「福島芸術計画×Art Support Tohoku-Tokyo」を全県的に実施。岩手県と宮城県はエリアを絞り、現地のプロジェクト運営の体制づくりや地域資源を深める活動へ注力した。「なんのためのアート」の手法を用いて、現地主導での実施となった「みやぎぶんか3ねんめ会議」へは事業の後援を行った。

共催＝特定非営利活動法人いわて連携復興センター、えずこ芸術のまち創造実行委員会、特定非営利活動法人Wunder ground、ひよこりひょうたん島プロジェクト実行委員会、大槌町、福島県／会場＝岩手県、宮城県、福島県／発行物＝『Art Support Tohoku-Tokyo PROJECT REPORT 2013』『海辺の記憶をたどる旅 つながる湾プロジェクト ドキュメントブック』『福島芸術計画×Art Support Tohoku-Tokyo 2013』



「きむらとしろうじんじんの『野点』in 大槌」、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業 (岩手)、2012年



「なんのためのアート」、宮城芸術銀河2013×Art Support Tohoku-Tokyo、2013年

人材育成プログラム

2009年度はレクチャープログラムとインターンプログラムの2つを展開。2010年度には人材育成の趣旨を明確にするため「Tokyo Art Research Lab (TARL)」を設立。2012年度より、講座だけでなく研究・開発を行う事業が始まった。現場の「知」と「スキル」を習得するプログラムとして、ゼミ形式で講座を実施。講座の成果をまとめたドキュメントは、その後のプログラムの基礎的なテキストとなった。2011年度は集中セミナーを実施するなど前年度の成果の活用や個々のトピックを深める講座を開催。2012年度より、講座だけでなく、プロジェクトの現場で必要となる新たなスキルの研究・開発を行う事業が始まった。アートプロジェクトの運営プロセスにおける記録から評価までの手法づくりが重点課題となる。2013年度は人材育成とスキル開発を行う「リサーチプログラム」と位置付けを再確認し、「講座」と「研究・開発」の2つの軸でプログラムを実施した。

レクチャーシリーズ「Tokyo Art School」

○2009年度

地域で活動するための課題を探し、様々な分野を超えブリッジをかけるクロストークを実施。

- ▶東京の解像度 (講師=畠山直哉×毛利嘉孝)
- ▶オルタナティブ・スペースの歴史 (講師=小池一子×白石正美)
- ▶はじっこから東京を考える (講師=坂口恭平×童野稔人)
- ▶プロダクションという方法 (講師=浅井隆×藤城里香)
- ▶特殊な東京 (講師=アンドリュウ・マークル×マーク・ダイサム)
- ▶『壁』のない東京へ (講師=塚本由晴×安富歩)
- ▶共生のための環境へ (講師=飯島博×藤浩志)
- ▶テクノロジー・情報・身体 (講師=藤高晃右×ドミニク・チェン)
共催=特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

インターン・プログラム「シッカイ屋」

○2009年度

概念教育ではなく、人を育成するための実践講座を実施。

- ▶レクチャー&ゼミ プログラム (インターン・ゼミ) (講師=帆足亜紀、若林朋子、野田恒雄、アサダワタル、作田知樹、鳥本健太、岡部大介)
- ▶フィールドワーク プログラム (特別トークイベント)
 - (1) 地域密着型アートプロジェクトの可能性 (墨東まち見世 2009 関連トークイベント)
 - (2) 子供×アートで地域をひらく (アーティスト・イン・児童館 関連トークイベント)
- ▶交流&コミュニティ プログラム(全体会) (ゲスト=西尾美也、岸井大輔、コバルト爆弾α、助田徹臣、伊藤悠、松島英理香、黒瀬陽平)
共催=特定非営利活動法人コミュニティアート・ふなばし

Tokyo Art Research Lab

○2010年度

[連続ゼミ]

- ▶プロジェクト運営ぐるっと360度 (コーディネーター=帆足亜紀/発行者=「アートプロジェクト 運営ガイドライン」)
- ▶アートプロジェクトの0123 (コーディネーター=小川希/発行者=「アートプロジェクトの0123」)
- ▶「見巧者」になるために~批評家・レビュー養成講座 (コーディネーター=小崎哲哉)
- ▶アートプロジェクトを評価するために~評価の(なぜ?)を徹底解明 (コーディネーター=若林朋子/発行者=「アートプロジェクトを評価するために~評価の(なぜ?)を徹底解明 評価ゼミ レクチャーノート」)
- ▶アート活動としてのアーカイブ (コーディネーター=特定非営利活動法人アート・アンド・

- ソサイエティ研究センター/発行者=「アート・アーカイブ ガイドブックβ版」(PDF) [「地域・社会に関わるアートアーカイブ・プロジェクトーP+ARCHIVE 一年の活動記録」]
- ▶アートのお金と法律入門 (コーディネーター=Arts & Law / 発行者=情報サイト「artscoop」)

[公開講座]

- ▶日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990-2010 (コーディネーター=熊倉純子/発行者=「日本型アートプロジェクトの歴史と現在」(PDF))
- ▶Tokyo Art School 2010 (コーディネーター=特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト])
- ▶世界の現場から Talk & Cast (ホスト=森司/発行者=「世界の現場からTalk & Cast」(ポッドキャスト))
- ▶川俣正トークシリーズ 東京を考える、語るII (監修・ホスト=川俣正/発行者=「東京を考える、語るII」)

発行者=「TOKYO ART RESEARCH LAB 2010」 [「TOKYO ART RESEARCH LAB REPORT 2010」]

○2011年度

[連続ゼミ]

- ▶アートプロジェクトの0123 (コーディネーター=小川希/発行者=「アートプロジェクトの0123 新装版」)
- ▶パブリック・リレーション講座 (コーディネーター=林千晶)
- ▶「見巧者」になるために~批評家・レビュー養成講座 (コーディネーター=小崎哲哉)

[集中セミナー]

- ▶アートプロジェクトの評価~評価の(なぜ?)を徹底解明 ver.2 (コーディネーター=若林朋子/発行者=「アートプロジェクトを評価するために2~評価のケーススタディと分析」)
- ▶アートプロジェクトの運営~実践の風景 (コーディネーター=帆足亜紀)
- ▶アートプロジェクトの研究~アートプロジェクトとは何か?~地域社会の「戦略」と芸術の「戦術」 (コーディネーター=熊倉純子)

[公開講座]

- ▶アート社会論 (コーディネーター=港千尋)
- ▶クリスト&ジャンヌ=クロード (レクチャー)
- ▶川俣正トークシリーズ 東京を考える、語るIII (コーディネーター=一般社団法人CIAN)
- ▶世界の現場からTalk & Cast (コーディネーター=森司、橋本誠)
- ▶アートプロジェクトを評価するために2~評価のケーススタディと分析 (コーディネーター=佐藤李青/発行者=「評価のケーススタディと分析」)

[ソーシャル・プラットフォーム]

- ▶アートのためのキャリア支援プログラム2 (共催=Arts and Law)
- ▶P+ARCHIVE (共催=特定非営利活動法人アート・アンド・ソサイエティ研究センター/発行者=「『現代アートの記録と記憶』プロジェクト 活動の記録2011」)

○2012年度

[連続講座]

- ▶アートプロジェクトの0123 (コーディネーター=小川希)
- ▶日本型アートプロジェクトの歴史と現在II (コーディネーター=熊倉純子/発行者=「日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年」)
- ▶構造茶話会—プロジェクト構造論 (コーディネーター=長島確、佐藤慎也)
- ▶「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性 (コーディネーター=帆足亜紀/発行者=「アートプロジェクト運営ガイドライン—運用版」 [「組織」から考えるアートプロジェクトの可能性—続くか、止まるか、それは「組織」次第かもしれない] (PDF))

【公開講座】

- ▶アート社会論II (コーディネーター=港千尋)
- ▶渋谷アートファクトリー計画 DIWO Lab. (コーディネーター=川井敏昌、岩岡孝太郎)
- ▶Creators and Law (コーディネーター=Arts and Law)
- ▶ネットワーク・ラボ (コーディネーター=小澤慶介、橋本誠)

【実践ゼミ】

- ▶実践!プロジェクトデザイン (コーディネーター=林千晶/発行物=『実践!プロジェクトデザイン講座—新しい価値を生み出すための方法—』)
- ▶P+ARCHIVE リアルARTプロジェクト・アーカイビング実践 (コーディネーター=特定非営利活動法人アート・アンド・ソサイエティ研究センター/発行物=『ドキュメンテーション 国際シンポジウム 地域・社会と関わる芸術文化活動のアーカイブに関するグローバル・ネットワーク・フォーラム』『種は船 in 舞鶴』アーカイブプロジェクト 活動の記録 2012])
- ▶評価のためのリサーチの設計と実践 (コーディネーター=佐藤李青/発行物=『アートプロジェクトのつかまえた : 「評価」のためのリサーチの設計と実践の記録』)

【運営】

- ▶TARL 運営プロジェクト (共催=特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] /発行物=『TOKYO ART RESEARCH LAB 2012』『Researcher's voice vol.1~4』)

【その他】

- ▶Tokyo Art Research Lab 2012 オープンディスカッション
- ▶複合型リサーチプロジェクトの実践 (発行物=『記録と調査のプロジェクト「船は種」に関する活動記録と検証報告』)
- ▶プロジェクトをつくる・プロジェクト

○ 2013 年度

【講座】

- ▶研修プログラムI ~表現・創作活動のための法と権利を学ぶ入門講座~ (コーディネーター=Arts and Law /発行物=『2013 表現・創作活動のための法と権利を学ぶ入門講座 講義資料集』)
- ▶研修プログラムII ~プロジェクトを守るための情報セキュリティ講座
- ▶集中セミナー: 運営・記録・評価のサイクルをつくる (コーディネーター=森司)
- ▶プロジェクト実践ゼミ-構想から実現へ/実現から継続へ (コーディネーター=橋本誠、大内伸輔) /発行物=『PPR 空想地学研究所 PAPER 準備号』)
- ▶渋谷アートファクトリー計画 Fab スターターズガイド (コーディネーター=Fab Cafe LLP /発行物=『FAB スターターズガイド』)
- ▶『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年』を読む (コーディネーター=熊倉純子)
- ▶アートポイント・アニュアル/発行物=『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』)
- ▶アートプロジェクトを456 (仕込む) (コーディネーター=小川希)

【研究・開発】

- ▶リサーチプロジェクトの検証: 記録=共有の手法を探る (発行物=『ノコノコスコープのイロハ』)
- ▶アートプロジェクトのインパクトリサーチ (発行物=『「助平の事例研究」活動記録と検証報告書』『デジタルアーカイブのススメ』)
- ▶アートプロジェクトの「言葉」を編む
- ▶プロジェクトをつくるプロジェクト
- ▶P+ARCHIVE (共催=特定非営利活動法人アート・アンド・ソサイエティ研究センター /発行物=『アート・アーカイブ・キット』)

- ▶アートプロジェクトにおける「音」の記録研究 (企画運営=東京藝術大学)

- ▶プロジェクト構想プログラム-「光の蘇生」プロジェクトを構想する (企画運営=特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]) /発行物=『「光の蘇生」プロジェクトを構想するリーフレット』)

【運営】

- ▶TARL 運営プロジェクト (共催=特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト])

発行物=『Tokyo Art Research Lab 2013』『組織から考える維持する仕組み“アート”と“社会”が長く付き合うためのインフラづくり』)



「アートプロジェクトの「言葉」を編む」、Tokyo Art Research Lab、2013年

東京アートポイント計画とは

東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

<http://www.bh-project.jp/artpoint>

東京アートポイント計画が、
アートプロジェクトを運営する「事務局」と
話すときのことは。の本

監修：森司 [東京アートポイント計画]

編集：坂本有理 + 佐藤李青 + 熊谷薫 [東京アートポイント計画]

編集協力：佐藤恵美

デザイン：福岡泰隆

イラスト：STOMACHACHE.

印刷：株式会社アイワード

発行：2014年3月31日

東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）

〒130-0026 東京都墨田区両国 3-19-5 シュタム両国5階

TEL: 03-5638-8803 / FAX: 03-5638-8811

E-mail: info-ap@bh-project.jp

<http://www.bh-project.jp>

©東京文化発信プロジェクト室、2014

All right reserved

Printed in Japan